



30年前の母のように、 わたしは、今、笑っている。

母に甘えすぎないように、間取りをキッパリ分けようと決めたのはわたしだった。

30年前、2人目が生まれることもあり、

わたしの4人家族は、実家を建て替え二世帯ぐらしの道を選んだ。

もったいないが口癖で、孫想いの母だった。

母の体が弱ってからも、子どもたちと母はよく散歩へ出かけた。

小さい頃と変わらず、道に咲く花や木の名前や、

大変だった時代を生きた話を、子どもたちは教えてもらったようだ。

介護は訪問サービスに頼りながら、自宅で行った。

父と母の最期するとき、子どもたちは“今までありがとう”と泣いた。

ひとを思いやれる人間に育ったのは、両親のおかげだ。

結婚し、出産した長女が、わが家で二世帯で住むことを申し出てきた。

わたしの、あたらしい二世帯ぐらしが始まった。

孫に、花や木の名前を、思いやりを、もったいないの心を、いのちのことを。

今度はわたしが伝える番だ。

二世帯ぐらし30年、今、笑っている。

考えよう。答はある。

ヘーベルハウス

事実。二世帯で暮らした「子世帯の91%」が「二世帯ぐらしは満足だった」と答えています。

(旭化成ホームズ「30年暮らした家族による二世帯住宅の評価と住まい継承の実態」調査より)